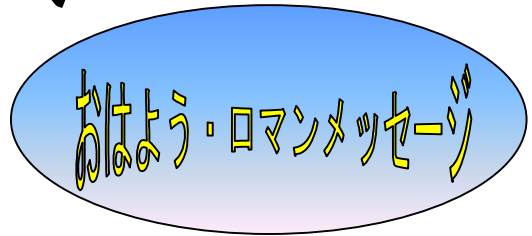


2001年7月市長の



先月のことですが、グアム島で行われました第十回太平洋科学学会に出席し、「八重山群島におけるマラリアとマラリア撲滅への道」ということで、二十分ほどいろいろと紹介してきました。やしの実大学の皆さん方が一緒に八名同行し訪問しましたが、その時にいろいろと講演したことを伝えてみたいと思います。

現在、八重山群島にマラリアは存在していませんが、かつて八重山群島はマラリアの島としていろいろな言い方で恐れられていました。沖縄本島あたりでは、ヤキーの島と言われる石垣島に行くと原因不明の熱病があり、それに罹ると死亡率が高いと恐れられていたものでした。八重山でも、このマラリアがどういう病気か分からない時には風土病として恐れられ、風気と言われ、大変住民から怖い病気として認識されていたわけです。

この八重山のマラリアについては、現在、八重山興業の会長である崎山寛宗さんの祖父崎山寛好氏が著書「八重山熱記」で、地元の医師として初めて八重山の風土病について広く論じたものがあります。しかし、八重山のマラリアもいつ頃から発生

したのかよく分かりませんが、言い伝えによると一五三〇年頃、西表島に外国の船がやってきて、その時にマラリアが一緒に入ってきたのではないかというふうに言われております。また、まったく違った異論があり、昔、八重山に住民が南方の方からやってきてその時に持ち込んだのではないかとも言われています。いまだに、このことについては不明のままになっています。

いずれにしても随分前から八重山でマラリアがあったことは確かであり、これについてはいろいろと実証するものがあるわけです。かつて琉球王府は八重山群島や宮古島等の先島に人頭税を課税したわけですが、その課税についてもさらに税収を増やすという目的で琉球王府は積極的に新しい村をつくり人口を増やし、

いわゆる税収を増やす政策などをとったわけです。そのために、離島の黒島や波照間島等の様々なマラリアでない地域から石垣島へ定期的に人口の移動が行われていました。



市長大瀧の記念講演

しかし、結果的にマラリアでその村が廃村になっていくということが、いろいろあったわけです。たとえば、

平久保半島の安良村は一九〇二年に廃村になっており、桃里節で有名な

桃里は一九一四年、崎枝は一九一五年、また名蔵や盛山、野底等の村々も一九一六年から一九三三年にかけてマラリアのために廃村となりました。このように多くの人々が廃村とともに命を落とし、マラリアのためにこの八重山に大変の被害があったということでもあります。

このようなマラリアについて民政府はいろいろと調査研究して、この病気はいつたいなにかということはいよいよ突き詰めるときがきました。東京帝国大学の三浦守治医学博士により、一八九四年にこの八重山の風土病がマラリアであるということがはっきり医学的に結論付けられたわけです。その時に、熱帯熱マラリア、三日熱マラリア、四日熱マ

ラリアの三種類のマラリアが確認されています。

ちなみにマラリアという言葉は、イタリア語でマール、これは悪いという意味です。エイリア、これは空気という意味ですが、合成語で「悪い空気」という意味で、なんとなく空気を伝わって病気が広がっていくというふうな、そういう印象があったのではないかと思います。そのマラリアも一八八一年、フランスの軍医ラベランという人が発見して、これは病原体によって移される、さらに一八九八年にはローナルド・ロスというイギリスの軍医がマラリアは蚊の媒介によつて起こるということを証明したのでした。

さて、このマラリアですが、八重山では数々の悲劇があり、廃村の様子からも言えますが、最も忘れては

いけないのはいわゆる戦争マラリアと言われた一九四五年当時の大流行したマラリアが最も悲惨な歴史であったのではないかと思えます。ちょうど第二次大戦の終わり頃、住民に対して強制避難の命令が一九四五年六月一日に発令され、すべての住民は六月十日までに軍の指定する避難地へ強制的に移動するように命令が下されました。登野城、大川、新川や四か字の方々はほとんど白水に移動になったわけです。そういう所は、もともと大変なマラリアの流行地でそこに住民が行くとマラリアになるのは分かっていたわけですが、軍の命令上どうしても行かざるを得なくてとうとうそこに一家総出で避難することになりました。その避難小屋は大変簡単な小屋で一間に十名とか四十名ほどが雑居しており、蚊を防

ぐための蚊帳も十分に準備されていなかったために直ちにマラリア蚊の襲撃を受けたわけでありました。案の上、避難して六月下旬から直ちにマラリア患者が続出し、草原の火のごとく猛威を振るって伝染したと言われています。食糧不足や栄養不良、あるいはマラリア苦の絶望などから住民がマラリアにかかる治療方法がなくて、一家がマラリアにすべてやられて一家全滅という地獄に化したわけです。当然、住民はどうせ死ぬなら自宅でと思ったわけですが、軍が許可しませんでしたので、とうとう次々と亡くなっていつてしまつたということが、大濱信賢先生の著書などでも伺うことができます。

しかし、終戦の八月一五日から四日後の八月一九日、ようやく避難地から各自宅へ許可が下され、やっと住民は家に帰ることができました。その当時のマラリア患者は一万六千八百八十名、実に人口の五三・三%がマラリアに罹っていたということになります。そして、マラリアで死亡した人が三千六百四十七名とすさまじい惨状をきわめていたのが戦争マラリアであつたわけです。たとえば波照間島からでは西表島に強制的に移動させられ、全住民がマラリアに罹つて一家全滅を含めて四七七名の犠牲者がたといわれ、悔やまれます。このような戦争マラリアに対し後に日本政府のいろいろと配慮があり、平和祈念館の建設あるいは戦争マラリアの犠牲者が供養されている慰霊碑の建立につながってきたわけです。

このように戦争マラリアで大勢の人々が命を失いましたが、やっと戦

後になってマラリア撲滅への道が開かれました。アメリカ政府は八重山のマラリアを撲滅するのに大変一生懸命でした。それまでもマラリア対策は戦前の沖縄県等によつて行われていましたが、キニーネを投薬して治療する程度のものでした。しかし、戦後琉球民政府のさまざまな対策がたてられ、このマラリアに対する積極的な防圧あるいは撲滅の施策が次々と実行されたわけです。

さて、戦争当時の一九四五年に発生したマラリアはいわゆる戦争マラリアと言われていますが、実はちょうど一九四九年頃から計画移民や自由移民として沖縄本島や宮古島から八重山に移民団が入植してきたわけです。その時に、六千四十五名ほどのマラリア患者が新たに一九四九年から約七年間で発生しています。こ



ヤシの実大学一行との記念撮影

れは、移民マラリアと言われていました。移民マラリアは当時、廃村になった地域に次々と入植して、そして戦時中残っていたマラリアが新たにきた人々に次々と感染させたということだと思えます。その移民マラリ

アは民生府の様々な対策によつて次々と撲滅され、最終的には一九六〇年に四名、六一年に五名の患者を最後としてこの八重山全域からマラリアが発生ゼロとなったわけです。

このように何百年と続いてきたと思われる風土病マラリアがとうとう一九六一年を最後として撲滅したわけですが、そこに至るまでは大変な努力があったわけです。アメリカ民政府も大量の物量あるいは資金を投与し、住民はマラリア対策の厳しいルールをつくり全住民が参加してマラリア対策に取り組んできました。その様々な努力が稔つてやっとマラリアが撲滅したというわけであります。そこで、マラリアの根絶に至るまでに、忘れてはならない有名な方がいます。その方はアメリカの昆虫学者でウィラー博士といいますが、

マラリア防圧対策の指導者でした。一番重要なところは、DDTを徹底的に散布して家屋の中にDDTが残る方式をとりました。これは残留噴霧方式といえます。このことによつて、たとえば七五%のDDTを家屋に噴霧したり、あるいは床下に10%のDDTを噴霧したり、室内には5%のDDTの油性剤を蚊帳に噴霧したりして、徹底的に蚊に対する駆除、対策をとつたわけです。そういうことが功を奏したということで、今日マラリアがなくなつて、約四一年間マラリア発生をみておりません。このようにしてマラリアが撲滅に至るまでには、大変な住民の努力と米民政府の強い指導があつたことを忘れてはいけないと思います。

ところで、最近八重山保健所が石垣島の河川を調査したところ、なん

とマラリアの媒体する蚊、これはハマダラ蚊といいますが、これが大量に見つかったということです。このことは、今日もしマラリアの患者さんがいたりして入ってくると、その蚊によつて吸血されてその蚊がさらに新たな人に移すことがあるということを示すことになるうかと思われまふ。ちょうど隣の韓国では一九七九年に撲滅宣言がなされています。しかし、一九九三年に一人のマラリア患者が発生し、五年後の一九九八年には三千九百三十二名の爆発的な流行が現在韓国にあるわけです。そういうことを考えますと、いったん撲滅宣言しても新たに在来患者は入ってくるということを十分に認識しておく必要があると思いま今日、マラリア全世界会では三億人以上が感染して毎日三千人位が死亡し

ているといわれています。なお、猛威を振るつていふことでもあります。しかも、薬が効かない耐性マラリアがあらわれてきており、かつてはマラリアの島として、十分にマラリアに関しては今後とも注意、警戒し、研究していく必要があると思ひます。以上で終わります。